

## 引き裂かれた故郷への思い

——『故郷のことば』を読み解く——

Torn Nostalgia:  
An Interpretation for *Hometown poem*

林 美 茂

LIN Meimao

中国人民大学哲学院

*School Philosophy at Renmin University of China*

*E-mail: mimolin1230@yahoo.co.jp*

### 摘 要

楊方は当代中国詩壇の新秀、她的詩歌所揭示的个人特殊“乡愁”体验是迄今所未见的、对于故乡怀着极其矛盾与复杂的情感是她作品的审美底色。思乡是古今中外文学的常见表现、而杨方诗中的故乡并不是一种形而上的人类存在与精神归宿的存在论意义的呈现、而是形而下的具体的现实故乡究竟何在的困顿。杨方的特殊性在于她作为汉族人出生在新疆这样潜在着民族冲突的地方、从而使她对于故乡的情感既思念又充满恐惧的复杂性。长大成人后的她逃离了故乡、选择在内地生活。可是、对于她来说、生命的受肉之地属于新疆的事实是不可改变的、使她的思乡与恐惧并存也是挥之不去的。她通过自己的诗歌、揭示了内心深处一道无法愈合的伤口、一种被撕裂的“乡愁”。本文通过对于她的诗作《故乡词》的解读、分析其从故乡出走的原因、故乡对于她的意义所在、以及心灵世界中的一座建立在“伤口”上的故乡究竟如何形成等问题、揭示其无法超越这种生存境遇的根本原因之所在。

### はじめに

現代中国における多くの女性詩人の中で、楊方は少し変わった作者である。その特殊性は彼女の人生経験と生きてきた境遇の独自性にある。その独自性における潜在的な問題は、彼女にとっての故郷とは何か？ 故郷はどこにあるのか？ 私は如何にして故郷に帰れるのか？ という人間としての帰属感の命題である。だが、もし問題がこれだけであれ

ば、当然何の特殊性もない。世界の文学の中で、「精神的帰郷」という問題に関しては既にたくさんの名著が世に出ているからだ。問題になるのは、楊方の詩における「帰郷」というテーマの中心が形而上の意味での漂泊感ではなく、多くは単に形而下において肉体を安置させる場所を探しているだけということであり、更には彼女自身が主観的に形而上の意味の探求を拒否していることである。よって本稿では、彼女の特殊性を明らかにしつつ、彼女の詩にある実体験をクローズアップして、現今中国が直面する不可避で敏感な現実問題に迫るものである。

楊方は新疆ウイグル族自治区のイリ河畔に生まれた漢民族の子供であり、中国の人口全体から見れば大多数の一員に入るが、その出生地からすれば、少数の集団に属する。この特殊な生い立ちによって、彼女の現実に生きてきた境遇が普通の人と違ってきたのである。新疆の少数民族から見れば、漢民族は外来の人であり、自分達とは違う入植者なのだ。新中国成立以来、政府は少数民族の優遇政策を進め、少数民族地区の少数民族にいろいろな特別優遇を与えてきているが、こうした措置でも少数民族の一部の民族主義者が漢民族を敵視することを根本的に変えることはできていない。中国が全面的に社会主義制度を推し進めた改革前の時期にあっては、こうした敵視は単に潜在的な力というだけであった。しかし、改革開放政策の実施、市場経済制度の導入という、所謂「中国の特色ある社会主義の道を歩ん」で以来、東西地域のアンバランスな発展と貧富格差が生まれ、曾ては隠れていた民族間の利益的衝突が露わになり始め、国外の反中国勢力の慫慂によって、こうした地区でテロの暴力が始まり、ここで生活する漢民族の生命の安全が直接脅かされるようになった。楊方はこの時期にこの地区で生まれた漢民族の子なので、身の回りで少数民族が漢民族を襲撃するという血なまぐさい事件を時には目撃していたのだろうか、おそらく自身の身の安全と、また両親の考えで、彼女は中国東部の安全な地区にある大学を選んで進学し、卒業後は両親の出身地である浙江省永康で就職したのである。

しかしながら、人間の一生においては多くの自由な選択肢がありつつも、自分の出生地と両親に関しては自分の意志で決めることはできない。自分で決めることができない出生地は一人の人間の生命の根であり、人がこの世界へ来る時の着陸地点でもある。このため、「郷愁」はとこしえのテーマとなり、文学、芸術の中で繰り返して表現されてきた。楊方の詩の創作はそれこそこの永遠のテーマ、故郷と異郷、出奔と帰郷などに真正面から向かい合っているのである。だが、彼女が他と違うのは、故郷を魂の安息地として描いていないことである。故郷は美しき終着点ではなく、反対にそこでは所々で死神の微笑みがただよっており、逃げなければならないのに永遠に逃げ切ることができない生命の「傷口」なのだ。この「傷口」が彼女の今までの生につきまとわれ、おそらくその一生には、このような引き裂かれる故郷への複雑に思う状態から脱しきれないことが運命づけられるのだろう。だが、まさにこの「傷口」が楊方の詩歌創作に異彩を放ち、詩壇の新星として

注目され、また彼女の詩の中に常に、また永遠に癒すことのできない痛みをもたらしたのだ。

では、楊方は如何にして自分の生きてきた境遇を表現したのか？ 故郷からの出奔が彼女に与えたものは何か？ 彼女はどのようにして自分の痛みを克服しようとしたのか？ 彼女はどのようにして詩的表現を通して、自分の傷口を包み込んだのであろうか？ これらの問題はこれから詳しく検証していくことにする。

## 一、自画像：一頭の逃げ回る鹿

たそがれ時 振り返ると その鹿がいた  
一切を見通す眼差し 私と静かに見つめ合う  
私の生命の一部分なの？ 私の生命の中のその鹿なの？  
——『尋鹿記』（《寻鹿记》）<sup>1)</sup>

楊方は『子ラクダのような目』という詩集を出版していたが、その中にある『故郷のことば』（《故乡词》）という副題に集められた作品群には、注目に値する作品が多くあり、上の『尋鹿記』はそのひとつである。『尋鹿記』は特別な詩であるということができ、作者の自画像に近い。

描かれているのは一頭の鹿であり、飼育している主人から角を切られ、鹿茸酒を作るために持ち去られた。それは「鹿を養う人はわからない、その膨大な鹿の角／それは無数の星とひとつの森林から成る、家へ帰る道などだ」、「新しい角が長く出る前、その鹿はどれほど憂い悲しみ、憤怒している」<sup>2)</sup>ことを知らないからである。もともとこの鹿はただ「一本の太い縄につなぎ止められ、河の洲で草を食んで」ただけであった。しかし、このひたすら「頭を低くして草を食む」だけの鹿は、鹿飼いによって自分の美しさと気高さを奪われ、故郷の夢（無数の星、森林、家へ帰る道）をはぎ取られているのである。このため、「私は見た。鹿が縄を半径として一周一周駆け回り／風に向かって遠くの山の息吹を嗅ぎ、ようーようーと鳴く。」遂にはある日、「彼は縄から逃れ、猛烈な勢いで走り去り、まったく行方が知れなくなる」<sup>3)</sup>のである。

この詩は楊方にとって大きな象徴的意味を持ち、彼女自身の今までの人生の描写のようである。彼女の詩集を通読すると、故郷からの「出奔」が基調となって、しかも現在、彼

1) 楊方『子ラクダのような目』（《骆驼羔一样的眼睛》）、漓江出版社、2014年7月、第13頁。

2) 同上、第12頁。

3) 同上。

女の肉体は既にも「出奔」していたのだ。問題は、彼女の精神は依然として故郷を引きずっているが、既に「出奔」したその故郷へ帰ることは叶わず、更には如何にすれば帰郷するのかも分からない状況に陥っているのである。よって、彼女は主人から気高くて美しい角を切られた鹿の運命の中で、自己存在と対応するものを探しだし、同病相憐れむ存在を見つけた。「たそがれ時 振り返ると その鹿がいた／一切を見通す眼差し 私と静かに見つめ合う／私の生命の一部分なの？ 私の生命の中のその鹿なの？」と呟いている。それゆえ、彼女はこの「出奔」の途中、「ずっとその鹿を、時空の法則を無視する鹿を探している」のである。

ここで言われる「時空の法則」がつまり何を目指すのか、この詩からだけでは全く不明であり、従って私は楊方の詩集の中から、彼女が故郷から「出奔」した原因を見つけ出さなければならない。しかし、いずれにせよ、私は確定的な答えを探し当てることはできなかった。自己人生を隠喩した作品であるこの『尋鹿記』から見れば、故郷は彼女に対して、彼女を育んだ土地でありつつ、また凶悪で恐ろしい暴力を隠し持った空間でもあり、このことが彼女の出奔の最も根本的要因であるかもしれない。この判断は、彼女の他の詩の中から証左を得られるであろう。例えば、「私は殺気の漲るイリ河畔には戻れない、一人座ってすすり泣く」（『悲しみはここのもの、また私のもの』（《悲伤是这儿的，也是我的》）<sup>4)</sup>、「私には祖国がある、父母がある、混血の出生地がある／私はその流血と開花の場所で長く暮らしていた」（『私は故郷のもの』（《我是故乡的》）<sup>5)</sup>。

「殺気の漲るイリ河畔」は「流血と開花の場所」であるという。彼女のように自分の故郷を描写する人はまたいるだろうか。故郷である「イリ河畔」、その水の流れは「殺気の漲る」という印象なのだ。「開花の場所」であるその故郷は本来美しい場所であるはずだ。しかし苦難の記憶もあるのは、そこが「流血の場所」だからであり、この複雑さ、矛盾、充ち満ちた緊張感、引き裂かれた情動は作者の故郷に対する記憶である。このような矛盾的情動と記憶がより完全で具体的な形を伴い、さらに恐怖が充ち満ちているのは次の『ソプラノ』（《女高音》）という詩の内容である。

#### ソプラノ<sup>6)</sup>

『マイラ』を唱うソプラノ、高音は装甲車の上に乗る

鋼鉄の装甲車、それはアコーディオンではなく、子供のおもちゃでもない

4) 楊方『子ラクダのような目』、第21頁。

5) 同上、第23頁。

6) 同上、第39-40頁。

それは漢族人の街を走り、リビアやシリア、中東を思い出させる

ソプラノ、七月のザクロの花はあなたに火をつけたの？

陽気なメロディー、愛情のメロディー

歌詞、マシンガンから吐き出された葉莢のように飛び跳ねる

装甲車が通った道、剥かれてずっと繋がっているリンゴの皮のよう

もし装甲車がずっと走って行ったら

地球は、もうひとつの皮を剥かれたリンゴになるの？

戦争、動乱、憎悪、紛争を削れ

全ての不穏な、傷跡のある表皮を削れ

故郷、出生地をも削る

もし出生地がなかったら、私はずっと生まれてこなかった？

もし出生地が一片のリンゴの花の中にうまく自分を隠すことができたなら

地球はリンゴの一山の中に上手く隠れ

私はソプラノの中に上手く隠れることができる

私にはもう言葉がない、しゃべる必要がない

年老いた乞食が細かい硬貨を持たないように

私は沈黙することしかできない、でも沈黙は

即製爆弾のように込み合ったバスの中で突然爆発する

それは香りのいいケーキではない、青春でもない、甲高い声でもない

装甲車がソプラノと一緒に漢族人の街を走って行くのでもない

作者は故郷の「漢族人の街」で、「リビアやシリア、中東」を思い出し、そこで「ソプラノ」は「装甲車」によじ登り、「歌詞、マシンガンから吐き出された葉莢のように飛び跳ね」、彼女は身を隠すところがない。この時「私にはもう言葉がない、しゃべる必要がない」沈黙することしかできない。しかし、たとえそうであっても、いつか沈黙は「即製爆弾のように込み合ったバスの中で突然爆発する」かもしれないことが依然として彼女を脅かすのである。

恐怖！ 至る所に恐怖が満ちている。こうした恐怖は既に彼女の感覚から知覚へと入り、肉体から魂へと侵入している。まさにこのため、作者は他の詩の中で「傷を負った大雁、一羽一羽悲痛な鳴き声をあげて飛び去るのを見」て、「私は此処へ帰ることを、此処

で死ぬことを、此処に埋葬されることを二度と望み得ない」、「私は殺気の漲るイリ河畔には戻れない、一人座ってすすり泣く」（『悲しみはこのもの、また私のもの』<sup>7)</sup>）と悲しく告白する。

故郷は一人ひとりの人に対して取って代えることのできない存在であり、心の出発点であり、更には魂の終着地であることを、我々は皆知っている。この故郷が自分にもたらす成長の記憶が美しくあろうと、辛いものであろうと、幸せなものであろうと、苦痛なものであろうと……、その全ては自分の宿命の中で受け入れていかなければならない経験であり、また自分では変えることのできない歴史でもある。まさに作者が「私の愛情、それは新疆のものであり、何人たりとも私に道半ばで捨てさせることはできない」（『私は故郷のもの』<sup>8)</sup>）と言うように、この言葉はいささか固執しており、自分だけの一方的な思い込みをしているように見えるが、これは事実であり、自分が故郷から捨てられるように他人から思われる必要はないし、自分で捨てようとしても不可能であるのだ。

既に述べたように、作者は新疆で生まれ、彼女はその場所を「混血の出生地」と呼んだ。そこは美しい土地で、その青空、白雲、鮮やかな花々、草原、湖は多くの人々を魅了してきた。しかし近年、民族分離主義者は一連のテロ事件を起こし、この天国のような土地に苦難の血をとび散らした。鮮やかな花と流血、歌声と弾丸の転化は往々にして人々の不意を突いて発生するのである。まさにこうした経験のために、作者の詩句の中の故郷には、我々のよく知る青空、白雲、雪山と鏡のような湖といったような夢幻の世界は二度と現れず、「殺気の漲る」暴力の影が映るのである。作者も自分で「その中に、暴力の沈黙があり、美があり、苦難があり」、「故郷は他の人にとって、暖かくて落ち着く場所であり、母の子宮のように安全な場所であり、私にとっては、傷害と脱出の場所である」（霍俊明：『枝分かれした木の上を歩く、河の支流を歩く——楊方インタビュー』（《走在分叉的树枝上，走在分支的河流上——杨方访谈》））と率直に告げる。こうした複雑な感情の中で、彼女は「この話題に関しては、あまり話したくない」という態度をとった。これは作者自身の言葉で言えば、故郷に対して「愛すれば愛するほど、傷つく」（同前）という逆説的で特殊な感情の動きなのである。

以上のことを理由として、我々は、あの傷ついて逃げ回っている鹿が作者自身の描写であることを知るのである。美しくあるべき故郷、しかしこのイリ河畔の肥沃な草に育まれた、星に充ち満ちた夢——彼女の気高い角——は、彼女を育てた主人——その美しい土地——によって暴力という辛い経験で収奪されてしまった。よって、彼女は「風に向かい遠くの山の息吹を嗅ぎ」、遂には逃亡を、遠方を選ぶのである。

7) 楊方『子ラクダのような目』、第21頁。

8) 同上、第23頁。

## 二、故郷への思い：郵便小包の隠喩

見ず知らずの配達員、あなたが小包を父と母へ渡す時  
 それは私を再び故郷へと渡すこと  
 私は重さ2キロの郵便物で食卓の上に現れた  
 私は食卓の欠席者、私は故郷の欠席者  
 ——『故郷へ送った郵便小包』（《寄往故乡的邮包》）

しかし彼女の作品をより広く読むにつれ、上述したような、作者が故郷から飛び出したと判断した理由は、別の側面によって覆されるのである。それは、「果子溝を通る度に、細くて長く峻険な路を通っているようだ。再び暖かく光り輝く故郷へと帰る」、「果子溝は私が家へ帰る度に必ず通る路であり、それは私の心の中では魂が落ち着く場所へと通ずる路」という表現だ（霍俊明：『枝分かれした木の上を歩く、河の支流を歩く——楊方インタビュー』<sup>9)</sup>）。作者の紹介によれば、以前、果子溝は彼女の故郷であるイリから天山を越えて外界へと通ずる唯一の道であり、家へ帰るときにここを通れば、イリ河畔の広大でラベンダーが天に届かんばかりの原野へと入るのである。作者が霍俊明氏のインタビューの中で言ったこの二つの言葉は、彼女の出生地が「暖かく光り輝く故郷」であり、それは「魂が落ち着く場所へと通ずる路」であることを明確に我々に告げるのである。これと前章で見た「殺気の漲る」流血の地がはっきり異なっていることは明らかである。

だが、もし別の個所で作者が語った内容を見れば、彼女の言う「故郷」が、そこまで具体的でなくてもよいことに我々は気づくであろう。つまり、「故郷」は相対的に抽象な概念であって、ただ帰すべき精神的志向性なのだ。例えば、『淡い灰色の瞳』（《淡灰色的眼珠》）という詩の中で、作者は「本当に、どこだって私を引き留められる場所などありはしない／地表のどんな道も仮想の故郷には通じ得ない／唯その死へと向かう道のりだけがある、生花と同じ、遠方と同じ」<sup>10)</sup>と言っている。ここで言われる「故郷」は明らかに抽象的なものだ。

また、たとえ具体的な地域があっても、それもやはり精神的な存在である。例えば彼女は「私はひとつの自治区をひとつの村に縮小する。ひとつの村を三本の樹に縮小する。三本の樹を私の身体の中に縮小する。薄暗い中、私はあの荒れ果てた、三本の樹しかない、偶然私が通り過ぎた村が、私の前世の故郷であると頑に思い続けている。」（霍俊明：『枝

9) 『首都師範大学住校詩人楊方詩歌創作研討会論文集』、首都師範大学中国詩歌研究中心、2014年7月、第135頁。

10) 楊方『子ラクダのような目』、第14頁。

分かれた木の上を歩く、河の支流を歩く——楊方インタビュー<sup>11)</sup>と言っている。つまり彼女の故郷は、天山を越え、果子溝を過ぎてその先にあるイリ河畔の原野である必要はなく、単に新疆全体であり、或いは彼女が偶然通り過ぎたある村であってもよいのだ。ある時は「暖かく光輝」いており、またある時は「荒れ果て」ている。このように作者の故郷を理解することができるのであれば、前述の矛盾を含んだようにみえる叙述も矛盾ではなくなるのである。

しかし問題は、作者にとって、彼女が繰り返し触れたあの「故郷」にもしも具体的に定まったものがなければ、彼女が「故郷へ送った郵便小包」はどこへ向けて送り届けるのだろうか？

#### 故郷へ送った郵便小包<sup>12)</sup>

書いて下さい、ひとつの郵便小包の詳しい住所を  
 166万平方キロメートルのウイグル自治区  
 35万平方キロメートルのカザク自治州  
 長さ1キロメートルのスターリン街、幅5メートルの勝利横町  
 父と母の名前を書く  
 重さ、品名、到着時刻を書く  
 数千キロメートル離れても聞こえるドアベル  
 1台のどのような四輪馬車、疲弊し、埃にまみれている  
 黄昏時にそれを送り届けた  
 途中の水の流れはよく知っている、馬が足を止める場所  
 外国ではない、異境ではない、別の星ではない  
 そこは私の出生地、私は他人と同じように生まれた  
 私は傷口の中の子供、敏感で、情が深い  
 小さい頃松藍を使って眉を描き、ヘンナをマニキュアとして塗っていた  
 庭のザクロとイチジク  
 全ては風の中の植物、流血、こっそりと花開く  
 それらは愛情の花粉を運んだことはない、密かに傷口を使って果実に栄養を与える  
 あの低く飛ぶ夜泣き鶯も、傷口から飛び出てきた  
 イスラム寺院のドームの上に常に棲むが、時に門楣の上にも舞落ちる

11) 『首都師範大学住校詩人楊方詩歌創作研討會論文集』、第133頁。

12) 楊方『子ラクダのような目』、第18-19頁。



それは夜に鳴き声を発し、流浪する魂のよう  
 見知らずの配達員、あなたが小包を父と母に渡す時  
 それは私を再び故郷へと渡すこと  
 私は重さ2キロの郵便物で食卓の上に現れた  
 私は食卓の欠席者、私は故郷の欠席者  
 故郷が無くなったら、私達はどうなるの？  
 平和な落ち着きがなくなったら、故郷はどうなるの？  
 ならば、書いて下さい：取扱注意！ と  
 荒々しく傷つけないで、再び私の郵便番号と電話番号を書いて  
 それは長いアラビア数字、並ぶ様は頭を無くした赤いバラのよう

この詩はこの詩集で私が読んだ中で最も好きな作品のひとつである。この他にも、『遺跡の上の烏孫国』（《遗址上的乌孙国》）、『私がまだそこに立っているのを見た』（《我看见我还站在那里》）、『清明上河図』（《清明上河图》）等がよい詩であると思う。

『故郷へ送った郵便小包』は、この詩集において作者にとってもうひとつの実人生の隠喩、つまり二つ目の自画像であり、前掲した『尋鹿記』とちょうど潜在的な対応を成しているように思われる。『尋鹿記』が作者の出奔原因の何かしらの情報を含んでいるとすれば、『故郷へ送った郵便小包』は作者出奔後の帰郷を隠喩しているのである。この詩は言葉の上では実のところ独特なものなど何もなく、ともすればありきたりで変化に乏しいもので、ひとつの「郵便物」が配達される様子を描いている。しかし、まさにこうした全く作為的でも修飾的でもない素朴な叙事の中において、正確で象徴的意味を持って作者と故郷との必然的な繋がりが表されているのである。

郵便物を配達するのに具体的な宛先が必要であり、はっきりした位置方向と行き先があるのは、皆が知っている。作者にとって、あの宛先は「外国ではない、異境ではない、別の星ではない／そこは私の出生地」であり、「数千キロメートル離れても聞こえるドアベル」であって、それらは全て具体的で現実に存在する郵便物が届く場所なのだ。よって作者からすれば、彼女の「故郷」はまず第一に具体的で現実のものでなければならず、また縮小も拡大もできない、まさに彼女の出生地なのである。しかしながら、問題は出奔後の作者である。彼女の帰郷の道程は人々を不安にさせ、破損することなく正確な到達は保証され得ないのである。何故なら出奔後の彼女はひとつの「郵便物」のようになって、「見知らずの配達員」に託して届けて貰うしかないからだ。途中で破損したり誤送されたりすることが発生しないのかなどは全く分からないし、予測もつかないのだ。よって、「父と母に渡す」、「再び故郷へと渡す」というのは、単に自分の心の望みだけである。たとえ一歩譲って、作者の望み通りになり、順調に出奔前の曾ての出生地に届けられたとして

も、彼女は依然として、「私は重さ2キロの郵便物で食卓の上に現れた / 私は食卓の欠席者、私は故郷の欠席者」だけな存在だということがはっきりしているのである<sup>13)</sup>。

そう、故郷に対して、彼女は永遠に唯の「欠席者」という身分でしか存在しないのだ。どいうのは、もし「郵便小包」を感情や魂の象徴物として故郷へ返し、現実の肉体が異郷である出奔先の遠方にあるならば、彼女は唯の「食卓の欠席者」となるわけだ。たとえばもう一步譲って、「郵便小包」を肉体の代替物としたとしても、彼女の帰郷はただ「送られた」というに過ぎない。これは魂が依然として此の地には無く、よって彼女は当然「故郷の欠席者」となるのである。まさにこの二重の「欠席者」という放浪意識の為、彼女は「私は故郷に対して無限の近さとまた無限の遠さを感じる、私は帰ってきた、同時に私は二度と帰らない」ということを深く思うのである（霍俊明：『枝分かれした木の上を歩く、河の支流を歩く——楊方インタビュー』<sup>14)</sup>）。

以上検証したところからみれば、作者の郷愁を形而上的な存在、即ち「仮想の故郷」に対してだけの帰依感情であると理解するのは出来ないことは明らかである。彼女からすれば、故郷はむしろ具体的現実の中に存在するのだ。だからこそ彼女は、「私はここから離れるつもりはない、あなたと同じ / 母は私に弓張り月の空と低く垂れ込める大地をくれた / どうしてそれを捨てられよう / 私は他の場所に新しい故郷を探し出すことなどできはしない / 見知らぬ土地に新しく故郷をつくることなどできはしない / 故郷は、生来備わっているもの、これを置いて他はない」（『新しい故郷を探し出すことなどできはしない』（《我无法找到一个新的故乡》）<sup>15)</sup>と告白するのである。詩集の中で、彼女は時に「仮想の故郷」を語ったり、さらには「白雲と同じように生きる」という憧れもするが、これは、ただ彼女が時折、「雲の一つ一つが、金メッキを施した菩薩が蓮の上に端座している。彼女はあなたを精神よりも高く明るい場所へ連れて行こうとする」（霍俊明：『枝分かれした木の上を歩く、河の支流を歩く——楊方インタビュー』<sup>16)</sup>ことを願っているためである。しかし、彼女の詩の中で、故郷は往々にして具体的であり、彼女が肉体を授かった土地であり、生来備わっている存在なのだ。

### 三、郷愁の痛み：傷口に建てられた故郷

霧靈山に来たように、はたまた別のどこかに行ったように  
それらはどれも立ち寄っただけ、私が最後に行きたいのは

13) 楊方『子ラクダのような目』、第19頁。

14) 『首都師範大学住校詩人楊方詩歌創作研討會論文集』、第136頁。

15) 楊方『子ラクダのような目』、第24-25頁。

16) 『首都師範大学住校詩人楊方詩歌創作研討會論文集』、第133頁。

この人生では決して頼みにできない故郷、それに死後の郷里  
 ——『霧靈山、ひとつの方向へ吹く風』（《霧灵山，风朝一个方向吹》）<sup>17)</sup>

では、作者の詩の中での「故郷」は、ただ具体的で、現実の中にしか存在しない行き先なのだろうか？ こうした理解も当然そうとは限らない。詩の中で、作者は我々にもうひとつの明確な「故郷」について述べている。それは死後の魂の行き先である。例えば、「もし移動する一群の渡り鳥について行くなら、ついて行く／ひそかに北へ向かう春、雨、暖気流、大気圧／青くほの暗いバイカル湖へとたどり着けるのか／あの大きく丸い墓地は、円満と宿命／親愛なる見知らぬ人、誰も私に言わない／あの年、あの日、あの夕暮れ、時は無限に延びる／高原の頂であるボルタラ、永遠に到達することはできない、永遠に、孤独に懸ける天涯」（『親愛なるボルタラ、親愛なる見知らぬ人』（《亲愛的博尔塔拉，亲愛的陌生人》）<sup>18)</sup>。また例えば、「しかし私はまだ故郷に帰っていない……／私はまだ大河の上流に帰っていない……／私はまだ山脈で一番高い頂に帰っていない」（『私はまだ故郷に帰っていない』（《我还没有回到我的故乡》）<sup>19)</sup>とある。詩の中で詠っている「あの大きく丸い墓地は、円満と宿命」、「高原の頂であるボルタラ」、「山脈で一番高い頂」等は全て「死」と繋がっている。「墓地」はもちろん言うまでもなく、「高原の頂」、「山脈の頂」も魂の行き先であって、生きている者は到達できないところである。よって彼女は「私はまだ故郷に帰っていない」、「私が最後に行きたいのは／この人生では決して頼みにできない故郷、それに死後の郷里」（『霧靈山、ひとつの方向へ吹く風』）<sup>20)</sup>と言う。この「故郷」は当然肉体が永遠に落ち着く場所、死である。

このように相対的に形而上的「故郷」のイメージに属するのは、彼女の現実での「故郷」の経験の源としてそうなのである。前に既に分析しここで再び述べなければならぬのは、彼女が詩の中で「私の故郷、あなたが見たように／イリ河は決して眠ったことはない、日夜その両岸から逃げる／夕暮れの光は河面に広がり、きらめく大鎌のよう」（『傷口に建てられた故郷』（《在伤口上建立一个故乡》）<sup>21)</sup>とはっきり言っていることである。明らかに、ここは人々の夢幻の樂園ではなく、逆に、危険が潜み、首に「大鎌」をピタリと当てられた、刻々と死が隣り合う、人々が「日夜その両岸から逃げる」という作者の故郷なのである。

このように、現実を生きてきた経験によって作者の精神的土台が築き上げられ、また彼

17) 楊方『子ラクダのような目』、第71頁。

18) 同上、第3-4頁。

19) 同上、第5頁。

20) 同上、第71頁。

21) 同上、第8頁。

女の「傷口」もでき、このため彼女は傷ついた心をもって出奔し、「故郷」＝出生地に取って代わるものを探し、新しい故郷をつくろうとした。しかし、この故郷も、彼女は自分の「傷口」の上に建てるしかなかったのである。彼女は父母の出生地、即ち社会学的意義における本籍地に着いた。しかし、彼女は決してここを認めることはできない。そこはただ父母の故郷であるだけなのだ。よって彼女は「私のように、永康という場所に住み／毎日その風に吹かれ、陽の光に明るく照らされる／しかし全ては夢のよう、私は曾てからそこに属したことはない、私はただ通り過ぎるだけ」（『もうひとつの故郷』（《另一个故乡》）<sup>22)</sup>）と言う。彼女は始終「傷口」の中でしか自分を確認し、自分を探ることができない。「傷を負った人が大小の道を行く／行けば行くほど遠く、故郷を離れ、ちり埃と苦難／傷を負った人が地球の表面を行く、自分を忘れて」（『今夜、一本のポプラだけが月の光へ向かってのびる』（《今夜，只有一棵杨树向着月亮长高》）<sup>23)</sup>）生きるのである。よって、彼女は「大地の上では我々は皆鞭で打たれる家畜／停まることのない馬蹄のように、盲目的に遠ざかり駆けてゆく」（『急胡相問』（《急胡相问》）<sup>24)</sup>）と言う。こうした家畜のような人生の運命や情状も、彼女が「故郷」から出て行った後の精神的映しなのだ。ここで、我々は作者のもう一つの作品、いわば三枚目の自画像を見つめることができた。それが『歩き黒馬』（《黑走马》）である。

#### 歩き黒馬<sup>25)</sup>

私は一頭の歩き黒馬を見たことがある  
河州で、冬のノニレ林  
分かれた枝の上、月はライフル銃の照準円のよう  
歩き黒馬、ひっかけ縄を身につけ、闇夜の毛皮は光るように洗った  
たてがみを振り垂れり、まるで夜の歌

それはお隣さんの車を引っ張るあの馬か？  
白昼鞭打たれ、ほこりっばい路上で  
高い麦わらの束を引き歩く  
夜は小さな厩で、手綱を杭にしっかり結ばれる  
音も立たずに草をはむ

22) 楊方『子ラクダのような目』、第59頁。

23) 同上、第83頁。

24) 同上、第51頁。

25) 同上、第32-33頁。

いや、それはきっとあのおとなしい馬ではない  
 それはきっと銃口の下でも、大地をくまなく歩きがる黒馬なのだ  
 暗闇を通り抜ける旅行者のように、詩人、亡命者のように  
 不安、動揺、探求  
 おもがいの鉄の留め具、きらきらと光る  
 蹄鉄の音が澄んで聞きよい、大地に馬蹄形の傷口を残す

それはどんなことを知らせてくれるのか？  
 尽きることなく広々とした空間に囚われた歩き黒馬  
 どんなに歩いても、抜け出すことはできない歩き黒馬  
 風に吹かれるイチジクの木、ゆらゆら揺れる葉と果実  
 牛乳と露を用いてきれいに洗い、彼にお腹いっぱい食べさせる

無知へと向かわせる途上  
 永遠に見知らぬ馬として  
 ひっかけ縄を身につけ、大地を歩き回らせる  
 読経する者の祝福を、彼に手向け、影のように寄り添って歩かせる  
 自分の故郷へと流刑に処し  
 故郷を山脈の反対側で、山脈のように熟睡させる

「銃口の下でも、大地をくまなく歩きがる黒馬／暗闇を通り抜ける旅行者のように、詩人、亡命者のように／不安、動揺、探求」、これは当然、詩人自身が「尽きることなく広々とした空間に囚われた歩き黒馬／どんなに歩いても、抜け出すことはできない歩き黒馬」であることを喩えている。ここでの「尽きることなく広々とした空間」は「遠方」を指しているが、これは果てしなく遠い彼方に囚われ、「故郷」から逃げつつ、方々に「故郷」を探し求める詩人でないのだろうか？ 一方、「自分の故郷へと流刑に処し／故郷を山脈の反対側で、山脈のように熟睡させる」のは、「帰郷」という願いを胸に抱いた詩人の心の中を描写したものである。こうして生きてきた境遇や状況は、作者の他の作品中でも関連した裏付けを得ることができる。例えば、「本当に、どこだって私を引き留められる場所などありはしない／地表のどんな道も仮想の故郷には通じ得ない」（『淡い灰色の瞳』<sup>26)</sup>）、と彼女は告白する。作者にとってみれば、現実の中で自分を引き取って、美しき「故郷」へ通すことがただの「想像」上の、存在しないものである。よって、詩人は、出

26) 楊方『子ラクダのような目』、第14頁。

奔する途中で、自分の打ち建てようとする新しい「故郷」、この「故郷」は最後まで「傷口」の記憶から逃れることはできず、そこで生きるというのは「鞭の下」でのことであり、「銃口」に背を向けて生きるのと同じようなことなのだ。こうした意識の下で生きる詩人にとって、「唯その死へと向かう道のりだけがある、生花と同じ、遠方と同じ」<sup>27)</sup>と感じるほかに解脱の道はないのである。

作者が示したこれらのことから、彼女の肉体は既にあの痛々しく苦しい「故郷」から出て離れているが、その精神は本当の意味では過去の記憶を振り切っていないことがすぐにわかる。彼女にとって、ひとつのはっきりした故郷は出生地であり、もうひとつの不明確な新しい故郷は遠い場所にある。ただそれが墓場まで通じていることだけがわかっている。彼女はただ揺りかごから墓場までを生きるだけで、人生はふさぐことのできない「傷口」のようであり、どのような新しい「故郷」を見つけたとしても、それは全て「傷口」の上に建てるしかないのである。「傷口」が彼女の故郷なのだ。

### むすび：傷口の中の子供

作者のこうした「傷口に建てられた故郷」から漏れ出てくる悲観的な感情はもうこれ以上の解釈を要しないであろう。問題は作者が何故こんなにも悲観的なのかである。我々がこれをより深く考える必要がある。

彼女の言い方をすれば、自分は「傷口の中の子供」（『故郷へ送った郵便小包』）である。ならば当然、彼女は痛みに取り囲まれており、痛みの記憶は宿命ということになる。しかし、まさに痛みから逃れる為、彼女は出奔し逃亡することを選び、新しい故郷を探し、遠くに行くという選択をしたのだ。もしこの遠くの地までも唯「その死へと向かう道のりだけがある、生花と同じ、遠方と同じ」であったならば、彼女の出奔は意味があったのだろうか？ いずれにせよ死ぬのであれば、その時なぜ逃げる必要があったのか？ たとえ出奔したとしても、遠くに新しい故郷がないと知れば、生まれ故郷へ戻る方がよかったのではなかろうか。少なくともそこには父母や親戚がいる。しかし、なぜ彼女は故郷ではない遠方に留まる必要があったのであろうか？ 彼女が思い得たのは、自分が死んでから戻ることくらいなのだろう。よって彼女は「もしある日私が無辜の死をここで遂げたら／このザクロの木の形式で再び帰ってくることを求める／6月の花の熱情と熱愛を以て／9月の果実を砕く歯と痛みを以て／恐怖に充ち満ちて震えながら帰ってくる」（『新しい故郷を探し出すことなどできはしない』<sup>28)</sup>）と言う。作者のこのような生の選択に関わる理由

27) 楊方『子ラクダのような目』、第14頁。

28) 同上、第24頁。

は、私は彼女の作品の中にその答えを探し求め続ける。

詩人林莽氏がこの詩集の為に作った「序」では、作者が「探し求めるために歩み続ける人」<sup>29)</sup>であるという認識を示している。作者自身もまた「私が探し求めることは永遠のことであり、探し求めることが心の中の故郷であり、またもう一つの別の故郷であり、もう一人の自分である。この探し求めることが、影のように私にぴったりと寄り沿って行くであろう」と認めているのである（『枝分かれした木の上を歩く、河の支流を歩く——楊方インタビュー』<sup>30)</sup>）。

「探し求める」？ これは表面上堂々とした理由だが、私は彼女が何を探しているのか見えてこない。故郷なのか？ 彼女は既に詩の中で、一つは出生地、一つは墓地、その他は「新しい故郷などけっして見つけれられない」と言っている。では彼女はあと何を探しているのか？ もし作者が探しているのが「もう一人の自分」であれば、それこそ作者の出奔は「自分が自分の異郷となった」からであることを意味している。もしそうであれば、問題は自ずと哲学というレベルへ上がり、人間存在の省察へと入る。残念なのは、作者が真にこの最も重要な一点を意識していないため、彼女は自己の外においてのみ探し求め、内心に帰って自我を確立していないということだ。当然、彼女が「ゴドーを待ちながら」の登場人物のように、果てしない「遠方」や「もう一人の自分」を待つことだとしていて想定する人がいるかもしれない、残念ながら作品の中で拒絶しているのは、まさにこうした不可欠な深さなのである。彼女自身も「私は詩歌の‘実存的啓示’といった重いものに自分の身を押しつぶされたくない。私は女性の思考はそう重くなる必要はないと思う。女の本性は浅はかであり、生命というのは本来、持ち出してはすり減り、無駄に日を送るものだ。これによって、私は助けようのない劉禅であることがわかる。楽しさのあまり根本を忘れることができる場所さえあれば、決して物事の大変なところに向かって立とうとはしない」<sup>31)</sup>と率直に認めている。

このような告白を照らして考えれば、作者が「実存的啓示」という思考から、自分の「出奔」と「帰郷」の間の矛盾を、人間の「実存」意味で深く思索しようとしていないことは明らかである。つまり、彼女は自分が人間としてどうしてこのように生きなければならぬのかということ人間存在の根底から考えないのだ。こうしたより肝心なことをさらに一歩進んでより深く省察せねばならない問題は、彼女の作品の創作過程において基本的に意識されなかったのである。このため、彼女は自分の故郷に対する望郷の念を、人類の精神的帰郷という高みにまで持ち上げることはできなかった。確かに、作品の中で彼女

29) 林莽『序：探し求めるために歩み続ける人』（《序：为寻找而不断行走的人》）（楊方『子ラクダのよ  
うな目』、第1頁）。

30) 『首都師範大学住校詩人楊方詩歌創作研討会論文集』、第136頁。

31) 同上。

は「河の流れ」という表現で人間の孤独を喩え、「河の流れは実は一人の孤独な人、孤独な場所からやってきた」という認識を示し、さらに「河の流れ」を通して人生の問いをも見せている。例えば、彼女は「もし流れを遡れば、我々の魂は最初の清浄な水源へと帰り着く」<sup>32)</sup>と言っている。ただし、詩集の中のそうした「河の流れ」に関する作品では、彼女の「故郷」に対する経験や「河の流れ」で人間存在を暗喩することの間の関連性などが見えない。こうした心残りは、当然彼女が「実存的啓示」を拒否している姿勢に原因があるのである。

従って、楊方は自分の特殊な故郷の記憶と生命の実体験から出発して、肉体の出奔と魂の帰郷の関係と、人間存在の問題として取り直す必要があると思う。目下のように、「私は追い求めるために、一生盲目的に乱れ歩く」(『燕山の頂』(《燕山之頂》))<sup>33)</sup>という「謙虚さ」で満足してはいけないのである。人間は「自分が自己の異郷になった」時、「遠方」の意味とは何か？ 自分がなぜ引き裂かれた故郷への思いという事態が起きたのか？ これらは単に形而下的に嘆くのではなく、より形而上的に「人間存在」の問題として自己認識を高めて行かねばならない。もしそうでなければ、彼女は永遠に唯の現実にある「故郷」の局外者でしかないばかりか、精神的な局外者になることも逃れないのである。人間は、生のより深みを求めるべき時、自分が「助けようのない劉禅であること」だと自慢気に瀟洒としたような態度であってはならないのだ。

32) 『首都師範大学住校詩人楊方詩歌創作研討会論文集』、第140頁。

33) 楊方『子ラクダのような目』、第62頁。